ハルの夢

波瑠　耕治
柏木　晴海

客入れ
舞台、幕で覆われている

客入れの音楽が終わり、会場が静寂に包まれて
水滴が落ちる音
開演

波瑠　最近、考えるんだ。
何で俺は生まれてきたんだろう。
考えたことある。
あるよな。
でもさ、俺は、最近になって、ようやくそういうことを考えるようになったんだよ。
おかしいかな。
おかしいよな。
でもさ、本当に考えたことなかったんだよ。
朝がさ、変わる日ってあるだろ。
日にちは忘れたんだけど、この前、冬から春に、朝が変わった日あったろ。
分からない。
あったんだよ。その日にさ、ふと思ったんだよ。
何で俺は生まれてきたんだろうって。
お前もさ、考えたことあるだろ。
いつ考えた。
答えは。
だよな。
そんなの知るわけないよな。

波瑠が幕を取り外す
SE　鳥のさえずり等、春を感じさせる音
照明　ぼんやりとハルを照らす
舞台中央に、ぼろぼろのパイプ椅子があり、
殴られ、ぼろぼろの柏木（以下ハル）が後ろ手に縛られ、椅子に縛りつけられている

波瑠　今日も良い天気だよ。
ハル　：：

波瑠　今日も良い天気だよ。
ハル　そんな良い天気の日に、よく人を殴れるな。
波瑠　天気と人を殴るのは、関係ないだろ。
ハル　…そうだな。

波瑠　何考えてる。
ハル　聞いてどうするんだよ。
波瑠　気になるじゃん。
ハル　昨日と変わんねえよ。
波瑠　…

昨日と変わんねえよ。
昨日も、昨日と変わんない。
毎日、昨日と変わんない。
なぁ、人ってさ、そんなに一つのことを考え続けられるものなのか。
ハル　俺たちが、今まで殺してきた奴ら。
ずっと一つのこと考え続けてきたんじゃないか。
「助けてくれ。」って。
波瑠　…そうかな。
ハル　そうだろ。
波瑠　どっかで、早く殺してくれって、思ったと思うよ。
どうやったら、殺してもらえるのか。
全部吐いたのに、何で殺してくれないんだ。
助けてくれ。
助けてくれ。
助けてくれ。
…

殺してくれ。
ハル　…そうかもな。
波瑠　そんなもんだろ。
一つのことを、ずっと考え続けるなんて無理だ。
ハル　…そうかもな。
波瑠　で、何考えてる。
ハル　…昨日と一緒だよ。
波瑠　…

波瑠　明日にも、桜が咲きそうだったよ。
ハル　…
波瑠　桜、見たいか。
ハル　枝でも切ってきてくれるのか。
波瑠　そんなことしないよ。

ハル　不思議なもんだな。
波瑠　何が。
ハル　枝は切れないのに、人は切れるんだもんな。
波瑠　枝を切るのと、人を切るのは関係ないだろ。
ハル　そうだな。

ハル　不思議に思ってたんだよな。
　　お前さ、昔から、人間以外には、変に優しいところがあるよな。
波瑠　人間はさ、自分もだからな。
ハル　どういう意味だよ。
波瑠　…うまく言えないけど、痛みがわかるっていうかさ。
ハル　だったら、余計にできないだろ。
波瑠　お前さ、そんだけ殴られても、痛くないだろ。
ハル　痛いよ。
波瑠　痛くないよ。
　　俺には分かる。
　　お前はさ、俺に最も近い人間だから。
　　今のお前はさ、痛くないよ。
ハル　…
波瑠　人間にとっての痛みってのはさ、違うんだよ。
ハル　…
　　お前、狂ってるよ。
波瑠　お前もな。
ハル　…
波瑠　だからさ、俺、オヤジに言ったんだよ。
　　殴っても無駄ですって。
ハル　…
波瑠　俺が殴られちゃったよ。
ハル　…馬鹿野郎。

ハル　桜、見たかったな。
波瑠　見られないだろうな。
ハル　だろうな。
波瑠　期待とかしてるか。
ハル　まさか。
　　この先のこと位、わかってる。
　　お前のことも、よくわかってる。
波瑠　そう。
ハル　当たり前だろ。
波瑠　俺が逆の立場だったら、どうなってるかな。

ハル　ないよ。
波瑠　…
ハル　逆の立場にはならないよ。
波瑠　わかんないだろ。
ハル　わかるよ。
　　お前はさ、俺と最も遠い人間だから。
波瑠　…

　　波瑠、ハルを殴る
　　波瑠、ハルを縛ってるロープを解く

ハル　何してんだよ。
波瑠　…
ハル　おい。

　　波瑠、ロープを解き終える

波瑠　だからさ、俺、オヤジに言ったんだよ。
　　ミオって女を殺せばいいって。
ハル　…

　　ハル、立ち上がる。瞬間、波瑠、ハルを蹴る。吹っ飛ぶハル。

ハル　何で。
波瑠　美しい、桜で、ミオ。
ハル　波瑠。
波瑠　可愛い名前だ。
ハル　波瑠。
波瑠　顔も可愛かった。
ハル　波瑠〜。
波瑠　…
ハル　…
波瑠　逃げても良いよ。
　　分かってると思うけど、逃げられないから。

　　波瑠、ハルが座っていた椅子を移動し、座る

波瑠　晴海、今日、お前を殺す。
　　もう良いんだって。
ハル　美桜は、…、

波瑠　でもさ、俺は、まだ、あんまり良くないんだよ。
短い時間だけど、話そうか。
ハル　…
波瑠　…
ハル　じゃあ、俺から話すわ。
波瑠　最近、読書をしてんだよ。
狂ったように。
元が狂ってるから、何事にも、狂ったように取り組むんだろうけどな。
本当に狂ったように読んでるんだ。
普通の小説だろ、ノンフィクションだろ、宗教の本だろ、啓発本だろ、エロ小説だろ。
まぁ、ほとんど覚えてないんだけど。
でも、やっぱエロ小説が一番おもしれえなよな。
よくあんな事、考えるもんだよ。
天才だよ。天才。
原稿用紙に向かって、エロイ事考えるんだぜ。
真っ白な紙の中に、エロイ事が見えるんだぜ。
夢見すぎだろ。
真っ白な紙に、夢見すぎだよ。
俺にはできないな。
凄い。
…
まぁ、いいや。
面白い文章があってさ。
パチンコの台に座って、パチンコ台に自分の顔が写って、球の落ちていく様が、泣いてる様に見えるって書いてあってさ。
泣きたいのに、泣けない時に、そうするんだって。
そんな感じの文章。
あ、エロ小説じゃないぜ。
普通の小説。
…
ハル　お前さ、最近、いつ泣いた。
波瑠　…
ハル　俺やってみたんだよ。
波瑠　…
50000負けたよ。
泣けてくるよな。
ハル　…
波瑠　台の向こうに、ルパンがいて、そんな気分になれるかって話だよ。
ハル　泣けばいいだろ。

波瑠　…
ハル　泣きたいなら、泣けばいいだろ。
波瑠　…
何でこうなっちゃったんだろうな。
ハル　…
波瑠　暗いな。
うん、暗いよ。
暗いのは良くない。
歌うか。
歌おう。

波瑠、床等を叩く

波瑠　…
ハル　…
波瑠　ノリ悪いな。
手痛くなっちゃったよ。
ハル　…
波瑠　…
ハル　何が聞きたいんだよ。
波瑠　…
ハル　何を話せば、お前は満足するんだよ。
波瑠　…そうだな。
何を話せば、俺は満足するんだろうな。
ハル　…
波瑠　何だと思う。
ハル　知らねえよ。
波瑠　満ち足りるか。
溢れるか、溢れないかの、ぎりぎりのところで、足りるってことだよな。
欲張りだな。
溢れたら、がっかりするし、まだ入るんだったら、ぎりぎりまで入れたい。
分かるなぁ。
なぁ。
ハル　…
波瑠　俺は、そういう話をしたいのか。
ハル　…
波瑠　そういう話をしてくれ。
ハル　…

ハル　波瑠、お前は何で生まれてきたんだ。
波瑠　…
ハル　さっき言ってただろ。
お前は、何で生まれてきたんだ。
波瑠　…
ハル　答えは見つかったのか。
波瑠　いや。
ハル　…
波瑠　良いね～。
うん、良いよ。
俺さ、お前のそういうとこ、好きなんだよ。
俺はさ、何で生まれてきたんだと思う。
分かってる分かってる。
俺は馬鹿なんだよ。
馬鹿なのに、知りたがる。いや、違うな、馬鹿だから、知りたがる。
でも、何も理解できない。
理解もできなけば、すぐに忘れていく。
でも、知りたい。
知りたい。知りたい。知りたい。
知りたいんだよ。
くれ。くれ。
どんどんくれ。
そして、溢れさせてくれ。
お前が、俺を溢れさせてくれ。
そしたら、…殺せる。
ハル　…
波瑠　晴海、俺は何で生まれてきた。
お前は、何で生まれてきた。
ハル　…
波瑠　…
ハル　波瑠、お前は、神を信じるか。
波瑠　…

波瑠、立ち上がって、十字架に磔られたキリストの格好

波瑠　こういう奴か。
ハル　俺は信じない。
波瑠　やり損かよ。
ハル　波瑠、神ってのは何だ。
波瑠　…

ハル　何故人は神を信じる。
波瑠　…
ハル　神は、何故存在しなければならない。
何故人は許されなければならない。
波瑠　…
ハル　波瑠、人を殺すのに、疲れたことはないか。
波瑠　ない。
楽な仕事じゃん。
バン。
お終い。
頭も体も使わない。
世の、肉体労働の人たちには、本当に頭が下がるよ。
ハル　俺は疲れた。
波瑠　…
ハル　いつからだ、俺たちが、殺した後に、手を合わせるようになったの。
波瑠　いつからだろうな。
あれ、良いよな。
何となく、格好良いよな。

波瑠、手を合わせて

波瑠　お疲れ様でした。
ハル　お前は、手を合わせたとき、何を考えてる。
波瑠　…
ハル　手を合わせて、お経でも唱えてるのか。
波瑠　はいはいはいはい。
南無阿弥陀仏。まさか。
何も。
ハル　俺もだ。
何も言えない。
手を合わせても、何も言ってやれない。
…
秋に殺した、じじい、覚えてるか。
波瑠　あぁ、妙に悟った感じのじじいな。
ハル　あぁ。
あのじじい、言ったんだよ。
最近、死ぬのが怖かったんだって。
波瑠　…
ハル　俺聞いたんだよ。
今日は怖くないのかって。

じじい、何て言ったと思う。
波瑠　…
ハル　兄さん、手術経験はあるかって。
麻酔が効いて、意識がなくなって、腹ん中ごちゃごちゃやられて、麻酔が切れて、痛みと一緒に目を覚ます。
落ち着いてきて、点滴がゆっくりと落ちるのを見ながら思うんだよ。
もし麻酔から醒めなかったらって。
俺はいつ死んだんだって。
麻酔から醒めて、良かったな〜って心底思うし、心底怖くなるんだよって。
朝、目が覚めなかったらって。
波瑠　…
ハル　…
波瑠　だったら、俺らは良いことをしてるんだな。
ハル　…
波瑠　そうだろ。
ハル　波瑠、俺は、生きてるのが怖くなったよ。
朝、目が覚めるのが怖くなったよ。
波瑠　それで。
ハル　…
波瑠　許してほしいのか。
ハル　そうかもしれない。
波瑠　面白いな。
ハル　そうかもな。
波瑠　まったく理解できない。
ハル　あぁ。
波瑠　許すってのは、消すってことなのか。
ハル　…
波瑠　だって、そうだろ。
俺もお前も、何人の人間を殺してきた。
憶えてない。
仕事だから。
工場で、何個部品作ったってのと同じ、仕事だから。
世間的にはさ、俺らがしてることは、悪いことだ。
俺たちが殺してきた人間が生き返ることはない。
仮に生き返ったとしても、失った時間は、取り戻せない。
どっちにしろ、元に戻ることはないんだよ。
許されるってのは、どういうことだ。
無かったことにして欲しいってことか。
ハル　あぁ。
波瑠　悪い奴だな。

ハル　悪い奴。
波瑠　そうだろ。
ハル　…そうだな。
波瑠　言って良い。
ハル　…
波瑠　言って良い。
ハル　…
波瑠　俺思うんだよ。
違うな、思うじゃないな。
夢って言うか、希望って言うか、
俺はさ、自分の宗教を作って死にたいなって思ってたんだよ。
別に金稼ぎたいってことじゃないぜ。
ハル　…
波瑠　晴海。
びっくりしたよ。
やっぱりお前最高だよ。
さっき言ったろ。
俺最近読書したって。
同じ。
同じ、同じ。
ハル　…
波瑠　何だよ。どうした。
ハル　波瑠。
波瑠　何。
ハル　俺はさ、お前が怖い。
波瑠　は。
ハル　怖いよ。
波瑠　何で。
ハル　…
波瑠　晴海、お前は鏡を見て、怖いって思うか。
やめてくれよ。
ハル　…
波瑠　そうだよ。
すっかり忘れてた。
それを話したかったんだよ。
ハル　…
波瑠　晴海、お前、宗教作れ。
そして死ぬんだよ。
今さら、こんなのとか、こんなのとか信じるのは無理だろ。
よくわかんないし。

波瑠　だからさ、自分の神様作れば良いんだよ。
俺、この前、思いついちゃったんだよ。
すごいと思わないか。
宗教ってのは、どうやら、超自然的な力や存在に対する、恐怖だったり、神秘なんだよ。
そして、その恐怖や神秘に意味だったり、価値だったりを与えて、信じて、安らぎを得ようとするものらしいんだよ。
超自然的な力や存在ってさ、今まさにじゃないか。
だって、死ぬんだから。
そんな何度も経験できることじゃない。
だから、お前は今、お前だけの宗教を作ることができると思うんだよ。
多分、人はさ、死ぬときに、宗教が必要なんだよ。
そう、救われたいから、許されたいから。
あ、お前の言ってることと一緒だな。

ハル　…

波瑠　すごいと思わないか。
よく思いついたよな。
これから、これを毎回やっていこうと思うんだよ。
良いことしてるような気がしないか。
安らぎを得て死ぬんだから。
希望を持って死ぬんだから。

ハル　…

波瑠　まぁ、良い人って思われてもしょうがないんだけどな。

ハル　…

波瑠　誰も思わないよ。
考えよう。
お前の神様を考えよう。

ハル　…

波瑠　お前の神様は、何をしてくれる。

ハル　…

波瑠　海を割るか。

ハル　…

波瑠　悪霊を追い払うか。

ハル　…

波瑠　少女を生き返らせるか。

ハル　…

時間を戻す。

波瑠　…

ハル　そんな奇跡もあったよな。
面白いな。
俺の中にある、海が割れて、道ができる。

俺の中に住む、悪霊を追い払う。

波瑠　…

ハル　…を、生き返らせる。

…

時間を、戻す。

波瑠　…

ハル　時間を、戻せばいいんだよ。

波瑠　良いねぇ。

ハル　お前に殺されて、

麻酔から醒めたように、15の俺に戻ってるんだよ。

波瑠　良いねぇ。

ハル　時間を戻して、やり直すんだよ。

波瑠　良いねぇ。

ハル　15の俺は、どんな生き方を選んでいくと思う。

やっぱり馬鹿のままか。

やっぱり言われたまま人を殺すのか。

人を殺す力はあっても、何も守れない、無力なままか。

波瑠　…

ハル　違う。

スーツ着て、ネクタイなんかしちゃって、サラリーマンになっちゃうんだよ。

そして、好きになった女と所帯を持って、子どもが生まれて、家なんか買っちゃたりして、…。

朝起きて、奥さんの作った、ご飯とみそ汁と目玉焼きと、…、

ごみ出して、満員電車に揺られて、…、

上司に怒られて、取引先に頭下げて、…、

残業して、家に帰って、…、

もう寝てる子どものほっぺ触って、…、

奥さんと一緒にビール飲んで、…、

ハル、この台詞間に、鈍器を手にする

波瑠　…

ハル　波瑠。

神は、俺を救ってくれるのか。

波瑠　お前の神は、救ってくれないのか。

ハル　わからない。

波瑠　お前の神が、お前を救わないわけないだろ。

ハル　神は、俺を許してくれるのか。

波瑠　お前の神が、お前を許さないわけないだろ。

ハル、ゆっくりと波瑠の方に近づく

ハル　俺らが殺してきた奴の中に、救われた奴はいるのか。
許された奴はいるのか。

波瑠、立ち上がり、ハルの方を向く
ハル、立ち止まる
波瑠、ハルに向かい鈍器を持っている方の腕を掴み、ハルから鈍器を取る

波瑠　駄目だろ。
ハル　…
波瑠　…
ハル　そんなに甘くないか。

波瑠、ハルを掴み、奇声をあげて振り回し、投げ飛ばす

波瑠　残念。
ハル　…殺せると思ったのにな。
波瑠　残念。
ハル　…
ふざけんなよ。
何が俺の宗教だ。
何が俺の神様だ。
ふざけんなよ。
戻ってやるよ。
これは夢なんだよ。
お前に殺されてこの夢は終わるんだよ。
俺は眠りにつくのが怖いじじいとは違う。
こんな夢は終わった方が良いからな。
あぁ、殺してくれ。
さっさと殺して、この夢を終わらせてくれ。
本当の俺は15歳なんだよ。
お前に殺されて、俺は目を覚まして、15のガキなんだよ。
今度こそ真面目に高校通って、しょうもない工場かどっかで働いて、小汚い居酒屋の熱燗に酔って、給料安いだ、べだべだ言いながら、しょうもない人生送るんだよ。普通に暮らしていくんだよ。
そして、
そして、
そして、
くそっ。

…

波瑠　落ち着いた。

ハル　あぁ。

　　悪かったな。

波瑠　本当だよ。

ハル　魔がさした。

波瑠　がっかりしたよ。

ハル　すまんな。

波瑠　がっかりしたよ。

　　そういうもんなんだろうな。

ハル　あぁ。

　　俺も驚いたよ。

　　餌に食いついちゃったよ。

　　「くそ〜」だって。

　　お前の餌に食いつくなんて最低な気分だな。

　　入れ食いってこんな感じなんだろうな。

波瑠　魚の気持ちは分からないよ。

ハル　人間の気持ちだって、分からないだろ。

波瑠　そんなことないよ。

ハル　お前だって、飛びつくよ。

波瑠　大丈夫、俺は好き嫌い激しいから。

ハル　腹が減ってりゃ、何でも食うよ。

波瑠　面白いな。

　　そうかもな。

　　腹減ってるのと同じなのかもな。

ハル　俺を殺すか。

波瑠　…そうだな。

　　す〜っと消えちゃったのは、事実だな。

ハル　知らねえよ。

波瑠　本当にさ、欲しかったんだよ。

　　お前の中の、…欲しかったんだよ。

ハル　俺は、こんなもんだよ。

波瑠　お前が俺を溢れさせてくれると思ったんだよ。

ハル　無理だよ。

波瑠　…

ハル　お前には、無理だよ。

波瑠　…

　　聞いて良いか。

ハル　お前はさ、生きたかったのか。それとも復讐したかったのか。
波瑠　どっちだと思う。
ハル　わかんないから聞いてんだよ。
波瑠　俺にもわかんないよ。
ハル　…
波瑠　お前には、永遠にわかんないよ。
ハル　…
波瑠　俺も聞いて良いか。
ハル　あぁ。
波瑠　お前と出会って何年になる。
ハル　どれくらい経つんだろうな。
波瑠　最初から一緒だったんじゃないか。
ハル　初めて会った時のこと憶えてるか。
波瑠　憶えてるよ。
ハル　目つき悪かったな。
波瑠　お互いにな。
ハル　いつかこいつとは殺し合いになるんだろうなって思ったよ。
波瑠　結局、一方的に殺しちゃうんだけどな。
ハル　楽しかったか。
波瑠　楽しかったな。
ハル　俺も楽しかった。
　　俺で良かったか。
波瑠　お前で良かった。
ハル　俺もお前で良かった。
　　なぁ、お前から見て、俺は幸せか。
波瑠　…
ハル　俺はさ、幸せだよ。
波瑠　…
　　初めて人を裏切った時のことを憶えてるか。
ハル　憶えてないな。
波瑠　な。
　　俺も全然憶えてないんだよ。
　　初めてお前に会った日。
　　初めてお前となぐり合った日。
　　初めてお前と人を殺した日。
　　初めてセックスした日。
　　初めて高い肉食った日。
　　色々憶えてるだけどな。
　　初めて、人を裏切ったのって、いつだったんだろうな。
ハル　その割、裏切ってないのかもな。

波瑠　…
ハル　裏切られたって思ってるだけで、裏切ってないのかもな。
波瑠　やっぱりさ、お前は最高だよ。
ハル　もう一回聞くぞ。
　　…
　　お前から見て、俺は幸せか。
波瑠　…
　　組にちくったの、誰だと思う。
ハル　お前。
波瑠　当たり。
ハル　お前は俺を裏切ったのか。
波瑠　どうなんだろうな。
　　どう思う。

波瑠　出会ったのは、去年の12月。
　　クリスマスソングが街に流れて、本格的に雪が降り始めた頃。
　　彼女が、マリア様にでも見えたか。
ハル　…
波瑠　年が明けて1月。
　　初めて会った飲み屋で、偶然の再会。
　　自分の素姓を隠したまま、彼女と付き合い始める。
　　彼女、宗教学者目指してるんだっけ。
　　夢に向かって、健気に頑張る姿に惚れたのか。
ハル　良いね〜、信者だ。
波瑠　…
　　2月。
　　組を抜けることを真剣に考え始める。
　　でも、金がない。
　　そりゃそうだよ、俺らにとって、金は、目の前を動くだけのものだからな。
　　貯金。そんなことができるなら、こんな風になってるわけねえよ。
　　不便だよな〜、昔だったら小指落とせば、それで終わりなのに。
　　時代を恨むか。
ハル　…
波瑠　3月。
　　しょせん金は貯まらない。
　　お前は悩む。そして、別れることを決意する。
　　まぁ、金だけじゃないよな。
　　身の程をわきまえろって話だ。
　　しかし、彼女から、妊娠したことを告げられる。
　　イエス様、誕生だよ。

ハル　…
波瑠　4月。
お前は組を抜けることを決意する。
彼女には話したのか。
それは俺にもわからない。
でもお前は思った。
どんな形でも良い。
マリア様とイエス様と、3人で暮らしていければ良い。
…
そして、組を抜けるための金を用意し始める。
少しずつ、少しずつ、ばれないように。
ハル　…
波瑠　ばれちゃったけどね。
駄目だろ。組の金に手付けちゃ。
ハル　…
波瑠　…
ハル　俺はやってない。
波瑠　…
うん、俺がやった。
ハル　…
波瑠　お前がやったように、俺がやったんだから、お前はやってない。
ハル　…
波瑠　お前がこうなったのは、罠って奴だ。
濡れ衣。
ハル　…
波瑠　ごめんな。
ハル　…
どうして。
波瑠　何がさ、そんなに良かったの。
ハル　何でだよ。
波瑠　あれより良い女なんて、そこら中にいるだろ。
ハル　波瑠。
波瑠　あれより良い女なんて、腐るほど抱いてきただろ。
ハル　波瑠〜。
波瑠　…
ハル　…

ハル、以後の台詞を言いながら、波瑠に掴みかかる、振りほどかれ、倒れる

ハル　何でだ。

波瑠　…
ハル　俺たちがお前に何をした。
波瑠　…
ハル　何でだ。
波瑠　…
ハル　俺だけで良いだろ。
波瑠　…
ハル　何で美桜を、お腹の子を。
波瑠　…
ハル　殺してやる。
波瑠　…
ハル　絶対にお前を殺してやる。
波瑠　…
ハル　絶対にお前を殺してやる。
波瑠　…

波瑠　…
ハル　そんなの分かんねえよ。
俺にも分かんねえよ。
すぐそばにあったんだよ。
ぼんやりと、居心地が良かった。
やわらかい光に包まれてるように。
ゆらゆらとそよぐ風があって。
朗らかな、温かさが気持ち良かった。
…
俺はさ、彼女と、美桜と出会うために生まれてきたんだよ。
それをお前は。
それをお前は。
俺は、…。
俺は、…。
俺のせいで。
俺のせいで。
くそ〜。

波瑠　俺にも良く分からない。
よくわからない。
悔しかったのかもしれない。
居心地が悪かったのかもしれない。
やわらかい光に包まれてるお前が、
ゆらゆらとそよぐ風の中にいるお前が、

気持ち悪かった。

波瑠　最近、わかったんだ。
何で俺は生まれてきたんだろう。
…
意味なんかないんだよ。
俺が生まれたことに意味なんてないんだよ。
俺が生きてることに、意味なんてないんだよ。
…
朝が変わる日ってあるだろ。
1ヶ月くらい前、お前を殺そうって思った朝があったんだよ。
桜の開花予想が流れてて、
桜は、咲いたら、散らなきゃいけないんだよね。
桜が散るのは、あっという間だよ。
あぁ、今しかないって。
だって、もうすぐ春から夏に変わる朝が来るんだから。

ハル　春から夏に変わる朝なんてねえよ。
少しずつ夏の準備をしてるのが春だよ。
少しずつ秋の準備をしてるのが夏だよ。
冬の準備をしてるのが秋で、
春の準備をしてるのが、冬だよ。
その繰り返しだよ。
冬から春に変わる朝なんて、ないんだよ。
…
お前の言う通りかもな。
俺たちが生まれてきたことに意味なんてないのかもしれない。
…
だから、俺は、意味を探すんだろうな。

波瑠　晴海、終わろうか。
ハル　あぁ。
波瑠　不思議なんだけどさ、
多分、俺、初めて、人殺すんだと思う。
ハル　何人も殺してきただろ。
波瑠　人を殺すってのは、こういうことなんだろうな。
ハル　意味わかんねえよ。
波瑠　今まではさ、終わらせただけ。
何の感情もない。
初めて、死ね。って思った。

ハル　初めて、人を殺すんだよ。
波瑠　気持ち悪いよ。
　　気持ち悪いな。
　　告白みたいだ。
ハル　俺が羨ましかっただけだろ。
波瑠　そういうことなのかな。
ハル　お前に、夢は見れないよ。
波瑠　お前は、夢に破れたんだよ。
ハル　夢はかなったよ。
　　だからだろ。
波瑠　そうだな。

暗転

ハル　なぁ、お前から見て、俺は幸せか。
波瑠　幸せそうだよ。

SE　銃声
　　鳥のさえずり

音楽

了